

## 葵上の生と死

大井田 晴彦

### はじめに

光源氏の最初の妻であるにもかかわらず、葵上は、論じられることの少ない女君である。打ち解けることもなく十年の歳月を過ごしてきた、この夫婦仲が好転するかと思われた矢先、形見の男児（夕霧）を遺して葵上は早逝してしまう。物語の所要所に顔を見せるものの、藤壺や若紫、六条御息所といった主要な女君の物語の陰に隠れ、いわば場つなぎ的に登場させられている感もある。源氏の愛情の薄さに対応するごとく、物語の扱いは軽いといえよう。葵上の心内に立ち入った叙述もほとんど見られず、このことが彼女の存在を希薄なものとしてもいる。血肉を備えた女君というよりは、機能的な人物として物語の展開に奉仕させられているようでもある。その早すぎる退場も、葵上の位置を確固たらしめるための、構想上の要請と見られぬこともない。しかしながら、源氏と最初に関わった女性として、その存在は軽視できない。夫婦生活はわずか十年ほどであったが、しばしば回想され、死後もなお源氏の人生に影響を及ぼし続けている。冷淡で情味に

葵上の生と死（大井田）

乏しいという否定的な評価も、藤壺を思慕する源氏の一方的な視点からなされているに過ぎない。本稿では、葵上の短かった生涯をたどり、その意味を考えたい。

### 一

光源氏の元服は、父桐壺帝の肝煎りによって、「ひととせの春宮の御元服、南殿にてありし儀式のよそほしかりし御響きに落とさせたまはず」（桐壺①四五頁）「春宮の御元服の折にも数まさされ、なかなか限りもなくいかめしう」（同・四七頁）盛大に行われた。この際に、葵上が添臥に選ばれたことで、二人の夫婦生活が始まる。葵上は、春宮入内に匹敵する重々しさ、格式をもつて、源氏と結婚したといえよう。もとよりこの結婚は、彼らが望んだものではなく、二人の父たちの周到な配慮によってなされたものであった。

引き入れの大臣の、皇女腹にただ一人かしづきたる御むすめ、春宮よりも御気色あるを、思し煩ふことありけるは、こ

の君に奉らむの御心なりけり。「さらば、この折の後見なめるを、添臥にも」ともよほさせたまひければ、さ思したり。  
(桐壺①四六頁)

母方の親族を持たぬ源氏は、葵上との結婚によって、左大臣という最高の後見を得た。右大臣家からの、春宮入内の懇請を振り切つての源氏との結婚である。右大臣家との融和の意味もあり、常識的にみれば格好の入内の申し出であつたが、あえて左大臣は源氏を選ぶ。「昔より皆人思ひ落とし聞こえて、致仕の大臣も、またなくかしづく一つ娘を、兄の坊におはするには奉らで。弟の源氏にていときなきが元服の添臥しにとりわき」(賢木②一四八頁)との右大臣家の恨みを買うものの、左大臣は源氏に将来を賭けるのである。帝の信任厚い賢宰相という性格が、左大臣には顕著であるが、帝の意向に忠実だけでなく、世俗的な価値観を超越した真価をこの第二皇子に認めているのであり、彼を婿に迎えることで、かえつて一族が繁栄することをも見通しているのである。<sup>1)</sup>

(桐壺帝) いときなき初元結に長き世を契る心は結びこめつや  
(左大臣) 結びつる心も深き元結に濃き紫の色しあせずは

破格の帝からの和歌に、左大臣は恐縮しながら返歌する。後の展開を知る読者にとっては、「長き世」「色しあせず」といった言葉が皮肉に聞こえもしよう。周囲の人々の御膳立てによつて、盛大に行われた元服の儀であつたが、当の源氏夫婦は互いに親しみ

難いものを感じていた。

その夜、大臣の御里に源氏の君まかできせたまふ。作法世にめづらしきまでもてかしづき聞こえたまへり。いとさびにておはしたるを、ゆゆしうつくしと思ひ聞こえたまへり。女君は、少し過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、似げなく恥づかしと思いたり。(桐壺①四七〇四八頁)

物語は、元服の儀に多くの筆を割いた後、二人のやりとりについては簡潔に語つて済みます。当然詠まれたはずの、新婚の二人の贈答歌が記されないのは注意すべきであろう。対して、帝と左大臣の君臣の贈答が語られるところに、この結婚が、源氏と葵上の意思とは無関係な、父たちの思いによるものであることが示唆されているのである。結局、二人の贈答歌は最後まで描かれることはない。いわば、源氏との交流を遮断されている、共感を許されない女君として、葵上は造型されている、と言えそうである。とはいえ、葵上が源氏に魅了されていない、というわけではあるまい。むしろ源氏の若々しいまばゆさに気後れし、四歳の年長を恥じているのである。後にも「四歳ばかりがこのかみにおはすれば、うち過ぐし恥づかしげ」(花宴②三三三頁)とある。そのような女君の態度は、藤壺を恋慕する源氏には「いとかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず」(桐壺①四九頁) 思われるものでしかなかつた。

源氏と葵の結婚は、周囲から与えられたものであり、冒険を経

て、困難を経てようやく獲得した恋などとは、全く異なる。それだけに源氏には物足りなくもあるのだろう。その意味で、はるか後の、若菜上巻における、女三宮の降嫁に似たものが認められるのである。

## 二

物語の動態的な展開に伴って変化、成長したり、新たな相貌を示すような造型は、葵上にはなされていないように見える。光源氏の側からの一方的な視線によっているからとはいえ、葵上の人物像は固定的で起伏に乏しい。登場のたびに、同様の態度を繰り返す彼女は、いわゆる短編的人物と呼ばれるものに近い。後述するように、葵巻に至ってその造型に大きな変化が見られるようになるが、それ以前の巻々では、平板で単調といえる。

①殿にも、おはしますらむと心づかひしたまうて、久しう見たまはぬほど、いとど玉の台に磨きしつらひ、よろづをととのへたまへり。女君、例の、這ひ隠れてとみにも出でたまはぬを、大臣切に聞こえたまひて、からうじて渡りたまへり。ただ、絵に描きたるものの姫君のやうにしすゑられて、うちみじろきたまふこともかたく、うるはしうてものしたまへば、思ふことをうちかすめ、山路の物語をも聞こえむ、言ふかひありてをかしううち答へたまはばこそあはれならぬ、世に

葵上の生と死（大井田）

は心とけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく思はずに、「時々世の常なる御気色を見ばや。たへがたうわづらひはべりしをも、いかかどだに問ひたまはぬをぞ、めづらしからぬことなれど、なほ恨めしう」と聞こえたまふ。からうじて、「問はぬはつらきものにやあらむ」と、後目に見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。「まれまれはあさましの御言や。問はぬなど言ふ際はとにこそはべるなれ。心憂くものたまひなすかな。世とともにはしたなき御もてなしを、もし思し直るをりもやと、とぎまかうざまにこころみ聞こゆるほど、いとど思しうとむなめりかし。よしや、命だに」とて、夜の御座に入りたまひぬ。

（若紫①二二六〜二二七頁）

②君は大殿におはしけるに、例の、女君、とみにも対面したまはず。ものむつかしくおぼえたまひて、あづまをすが掻きて、「常陸には田をこそ作れ」といふ歌を、声はいとなまめきて、すさびるたまへり。（中略）まだ夜深う出でたまふ。女君、例の、しぶしぶに心もとけずものしたまふ。

（若紫①二五一〜二五二頁）

③内裏より、大殿にまかだたまへれば、例の、いとうるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ、「今年よりだに、少し世づきてあらためたまふ御心見え

ば、いかにうれしからむ」など聞こえたまへど、わざと人据ゑてかしづきたまふと聞きたまひしよりは、やむごとく思しだめたるにこそはと心のみおかれて、いとどうとく恥づかしく思さるべし、しひて見知らぬやうにもてなして、乱れたる御けはひにはえしも心強からず、御答へなどうち聞こえたまへるは、なほ人よりはことなり。

(紅葉賀①三二二～三二三頁)

④大殿には、例の、ふとも対面したまはず。つれづれとよろづ思しめぐらされて、箏の御琴まさぐりて、「やはらかに寝る夜はなくて」と歌ひたまふ。

(花宴①三六一頁)

右の四つの場面には、いずれも「例の」とあるのに注意される。久しぶりの源氏の訪問↓葵上の冷淡な応対↓源氏の不満といった繰り返しが、恒常的なものとなっている。①から見てゆきたい。

「玉の台」とは、婿たる源氏を厚くもてなす左大臣家の豪華なさまを言うが、この歌語は「何せむに玉の台も八重葎生へらむ宿に二人こそ寝め」(古今六帖・第六)のように、「蓬」「葎」の宿の対として、否定的に扱われる語である。この時期、源氏は若紫と末摘花という、二人の薄幸の姫君に夢中になっていた。そのような源氏にとって、左大臣家の婿扱いは、かえって気詰まりのものでしかない。父大臣に促されて渋々夫の前に現れた葵上は、「絵に描きたるものの姫君」のようで微動だにせず、「うるはし」い感じであるという。「うるはし」とは、端正で美しいが、整いす

ぎていて近づきがたい、親しみにくさをも感じさせる形容であり、葵上を特徴づける語である。この叙述からは、次の場面が想起されよう。

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとひほひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。

(桐壺①三五頁)

絵に描かれた楊貴妃が「うるはし」とされ、亡き桐壺更衣が「なつかしうらうたげ」と対比的に語られている。この記述は、中国風な文化と日本のその対比、あるいは中国の影響を脱して国風文化が成熟してきたことを示している。それはそれとして、画中の楊貴妃と似た形容が葵上に与えられているのが重要である。すなわち、「うるはし」系の女君として葵上はあり、対するもう一方の「なつかし」「らうたげ」系の女君として更衣がある。優しく親しみのもてる美しさである。この系統は、さらに、藤壺・紫上、すなわち「紫のゆかり」へとつながってゆく。「なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心深う恥づかしげ」(若紫①二三一頁)とは藤壺の形容である。物語がどちらの系譜に重きを置いてあるかは、言うまでもあるまい。

「うるはし」とともに葵上と関わり深いのは、「うとし」「恥づ

かし」という形容詞であるが、特に後者には注意される。若紫の場面①では、葵上が源氏の秀麗さに対して「恥づかし」と思う一方で、源氏も葵上の「まみ」を「恥づかしげ」に思う。この夫婦は、互いに不満を抱いているわけでは必ずしもない。むしろ非の打ち所のない相手であることは、よく承知している。まばゆいばかりの、相手の美質をよく知るがゆえに、かえって「隔て」が拡がるという皮肉な関係である。この場面を承け、紅葉賀の場面③には「いとどとく恥づかし」とあり、いつそう夫婦仲が疎遠となっていることが知られる。

しばしば指摘されるように、源氏と葵上の間には和歌の贈答が見られない<sup>(2)</sup>。とはいえ、二人がまったく言葉を取り交わさないわけではない。一般的な和歌の贈答ではなく、それに代わるものとして引歌の応酬があるらしい。若紫巻の引用①では、源氏の「いかかとだに問ひたまはぬ」の言葉尻をとらえ、「問はぬはつらきものにやあらむ」と和歌の一節を口にする。『源氏釈』は「君をいかで思はむ人に忘れせて問はぬはつらきものと知らせむ」の出典不明の古歌を掲げるが、「忘れねと言ひしにかなふ君なれど問はぬはつらきものにぞありける」(後撰集・恋五・九二八・本院のくら)、「言も尽きほどはなけれど片時も問はぬはつらきものにぞありける」(古今六帖・第五・おどろかす)、「怨むべきほどはなけれどおほかたも問はぬはつらきものにぞありける」(同・同・同)など類歌が多く、引歌を一つに絞りきれない。かかる葵

葵上の生と死(大井田)

上の態度は情の薄い冷淡なものとして、否定的に評されがちであるが、源氏との関係をかろうじて言葉によって架橋しようとする営みとして評価すべきではないか。もちろん、源氏は「問はぬなどいふ際はことにこそはべるなれ」と、不満を露わにし、二人の懸隔は一段と拡がってしまうのだけでも。源氏の「よしや、命だに」もやはり引歌があり、「命だに心にかなふものならば何かは人を恨みしもせむ」(奥入)を踏まえている。意味の通じにくい箇所だが、命の定めなき、人生のはかなさを言うことで夫婦仲の修復を訴えているものとみたい。

引用②と④は、源氏が琴を弄びながら歌謡を口ずさむ、というよく似た場面である。②は風俗歌「常陸」、「常陸にも 田をこそ作れ あだ心 や かぬとや君が 山を越え 雨夜来ませる」の一節。常陸で耕作に忙しくしているのに、あなたは私の浮気を疑って、山を越えて、この雨夜にお越しになった、といった意である。こもややわかりにくいのが、嫉妬する葵上をあてこする意図で口ずさんでいるのだろう。④は、催馬楽「貫河」、「貫河の瀬瀬のやはら手枕 やはらかに 寝る夜はなくて 親放くる夫」による。夫婦の語らいのないことをかなり露骨に言う。源氏とすれば、葵上といささかでも言葉を通わせたいのであるろうが、かかる皮肉な物言いに終始してしまうところに、この夫婦の不幸があるようである。

このように、源氏と葵上の言葉少なな対話は、主に引歌を媒介

とすることが特徴的である。それが奏功しているかどうかは別として、かろうじて言葉と言葉を通わせ、溝をうめようとする二人の努力を認めるべきなのだろう。

## 三

源氏と葵上の関係に変化が見られるのは、ようやく葵巻——葵上逝去の巻——に至ってである。「世の中変はりて後、よろづもの憂く思され」(葵②一七頁)と、桐壺帝讓位に発する源氏の閉塞感から葵巻は語り起こされる。また、この巻では、六条わたりの貴婦人として点描されてきた女性が、あらためて「六条御息所」として重みをもって登場してくる。

大殿には、かくのみ定めなき御心を心づきなしと思せど、あまりつつまぬ御気色の言ふかひなければにやあらむ、深うも怨じ聞こえたまはず。心苦しきさまの御心地になやみたまひても心の細げに思いたり。めづらしくあはれと思ひ聞こえたまふ。(葵②一九〜二〇頁)

冷え切っていたかに見えていた夫婦仲であったが、結婚九年めにして遂に葵上の懐妊を見る。源氏と左大臣家の絆は、さらに強靱なものへと結び直されるはずである。右大臣家に圧倒されつつある斜陽の左大臣家にとって、久々の慶事であった。

その年の齋院御禊は、源氏が供奉することが人々の注目を集め

ていた。葵上はもちろん、六条御息所も見物に出かける。両人の従者の間に車争いが起こり、御息所はこの上ない屈辱を受けることとなる。それを耳にした源氏は「あたら、重りかにおはする人の、ものに情けおくれ、すくすくしき所つきたまへる」振る舞いに心痛めるのだった(葵②二六頁)。かねてから不安定だった彼女の精神はいっそう錯乱を極めてゆく。一方、それと並行するかのように、左大臣邸では執念き物の怪が葵上を苦しめていた。

さすがにいみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、「少しゆるべたまへや。大将に聞こゆべきことあり」とのたまふ。「さればよ。あるやうあらむ」とて、近き御几帳のものと入れたてまつりたり。(中略)御几帳の帷子引き上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう思すことわりなり。白き御衣に、色あひいと華やかにて、御髪のと長うちたきをひき結びてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりけれと見ゆ。御手をとらへて、「あないみじ。心憂きめを見せたまふな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもり聞こえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。

(葵②三八〜三九頁)

物の怪に苦悶し、命の危ぶまれる我が妻に、源氏はこれまでにな  
い魅力を感じ、かつ愛おしきをおぼえる。「白き御衣に……御髪  
の……」と、詳細な描写が見られるが、これまで葵上の容貌や服  
装に関する記述は皆無であった。「をかしげ」「らうたげ」「なま  
めき」という一連の形容も、以前の彼女には見られない。「例は  
いとわづらはしう恥づかしげなる御まみ」とは、前掲の「後目に  
見おこせたまへるまみ、いと恥づかしげに、気高ううつくしげな  
る」(若紫①二二六〜二二七頁)に対応していよう。「いかがはあ  
はれの浅からむ」という語り手の評言があるように、ようやく二  
人がわだかまりを捨て去り、夫婦らしく細やかな愛情を交わし  
合っている、感動的な場面のように見える。しかし、かかる感動  
は、一転して恐怖と驚きへと突き落とされてゆく。

「何ごともいとかうな思し入れそ。さりともしけしうはおほ  
せじ。いかなりとも必ず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。  
大臣、宮なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれ  
ば、あひ見るほどありなむと思せ」と慰めたまふに、「い  
で、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへ  
と聞こえむとてなむ。かく参り来るともさらに思はぬを、も  
の思ふ人の魂はげにあくがるものになむありける」となつ  
かしげに言ひて、

嘆きわび空に乱るる我が魂を結びとどめよしたがひのつま  
とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変はりたまへり。

葵上の生と死(大井田)

いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。

(葵②三九〜四〇頁)

祈祷の声を緩めるよう願ったのは、葵上に取り憑いていた御息所  
の生霊の仕業であった。とすると、源氏が葵上に認めた新たな魅  
力も、実は御息所のものであった、という解釈も生じるが、そこま  
で考える必要もあるまい。後の、御息所の物の怪が去ったと見ら  
れる箇所でも、「いとをかしげなる人」「いとらうたげに心苦しげ  
なり」(葵②四四〜四五頁)という形容が葵上になされているの  
である。生命の危機を通して、あらためて葵上に本来備わってい  
た美質が顕著に発現されてきた、ということであろう。

#### 四

物の怪の跳梁に悩まされつつも、かろうじて葵上は男児を出産  
した。「院をはじめたてまつりて、親王たち、上達部残るなき産  
養どものめづらかにかめしきを、夜ごとに見のしる。男にて  
さへおはすれば、そのほどの作法にぎははしくめでたし」(葵②  
四一頁)とあるように、多くの人々から祝福される、待望の出産  
は、源氏の正妻としての立場を公的に揺るぎないものとして示し  
た。まだ安心はできぬものの、葵上が小康を得たのを幸い、源氏  
は参内しようとする。

「内裏などにもあまり久しう参りはべらねば、いぶせさ

に、今日なむ初立ちしはべるを、少しけ近きほどにて聞こえさせばや。あまりおぼつかなき御心の隔てかな」と恨み聞こえたまへれば、「げにただひとへに艶にのみあるべき御仲にもあらぬを、いたう衰へたまへりといひながら、物越しにてなどあるべきかは」とて、臥したまへる所に御座近う参りたれば、入りてものなど聞こえたまふ。(中略)「御湯参れ」などさへ扱ひ聞こえたまふを、いつ習ひたまひけむと、人々あはれがり聞こゆ。いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかの気色にて臥したまへるさま、いとらうたげに心苦しげなり。御髪の乱れたる筋もなくはらはらとかがれる枕のほどありがたきまで見ゆれば、年ごろ何ごとを飽かぬことありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ。「院などに参りて、いととうまかでなむ。かやうにて、おぼつかかなからず見たてまつらば嬉しかるべきを、宮のつとおはするに、心地なくやとつみて過ぐしつるも苦しきを、なほやうやう心強く思しなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなしたまへば、かたへは、かくもものしたまふぞ」など聞こえ置きたまひて、いとときよげにうち装束きて出でたまふを、常よりは目とどめて見出だして臥したまへり。

(葵②四三〜四五頁)

これほど愛情細やかな言葉は、以前の源氏には見られなかった。「少しけ近きほど……御心の隔てかな」というのは、かつての疎

隔を踏まえた冗談である。一命を取り留めたことによる、安堵感がかかる冗談を言わせているのである。自ら薬湯を飲ませる甲斐甲斐しさも、周りの女房たちを感動させるものだった。ここでの葵上は、かつての「うるはしく」「うとく」「恥づかし」い姫君ではない。「いとをかしげ」で「いとらうたげ」な、美質があらためて確認されてくる。出産の困難を経て、二人の懸隔は一気に解消されたといえよう。しかし立ち去ろうとする源氏の姿を「常よりは目とどめて」とあるのが意味深長である。これが夫婦の今生の別れとなることを、源氏は知らない。

葵上の様態は急変、はかなく息絶えてしまう。除目の夜、折しも左大臣家の人々の不在の時の出来事であった。数日の間、様子を窺うも死相が現れてきたのは如何ともしがたく、鳥辺野で茶毘に付されることとなる。

こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もなし。院をばさらに申さず、後の宮、春宮などの御使、さらぬ所々も参り違ひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ。大臣はえ立ち上がりたまはず。「かかる齡の末に、若く盛りの子に後れたてまつりてもごよふこと」と恥ぢ泣きたまふを、ここの人悲しう見たてまつる。夜もすがらいみじうのしりつる儀式なれど、いともはかなき御屍ばかりを御なごりにて、暁深く帰りたまふ。常のことなれど、人一人か、あまたしも見たまはぬことなればにや、



たぐひなく思し焦がれたり。八月二十余日の有明なれば、空の気色もあはれ少なからぬに、大臣の闇にくれまどひたまへるさまを見たまふもことわりにいみじければ、空のみながめられたまひて、

のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな  
(葵②四五〜四六頁)

この葬送場面で想起されるのは、夕顔巻における夕顔のそれである。夕顔もまた物の怪によつて落命し、鳥辺野で茶毘に付された。八月十七日のことであり、時節も葵上の死とほぼ重なる。夕顔を哀悼する源氏の詠歌「見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな」(夕顔①一八九頁)は、右の「のぼりぬる……」の和歌に酷似している。「人一人か、あまたしも見ぬこと」とは、現行の巻序に従えば、夕顔の死をさすが、成立に関わる問題の残る箇所である。前後関係は別として、夕顔と葵上の死がよく似ており、互いに連関していることは明らかである。さらに、はるか後の御法巻において、葵上の死は回想される。

昔、大将の君の御母君うせたまへりし時の暁を思ひ出づるにも、かれはなほものの覚えけるにや、月の顔の明らかに覚えしを、今宵はただ暮れ惑ひたまへり。十四日にうせたまひて、これは十五日の暁なりけり。  
(御法④五一頁)

(致仕大臣ハ) 昔、大将の御母上うせたまへりしもこの頃のことぞかしと思し出づるに、いともの悲しく、そのをり、

葵上の生と死(大井田)

かの御身を惜しみ聞こえたまひし人の多くもうせたまひにけるかな、後れ先立つほどなき世なりけりや、などしめやかなる夕暮れにながめたまふ。  
(御法④五一四〜五一五頁)

葵上の死もやはり同じ頃の出来事であるが、ことさらに葬送が八月十五日と明示されているのは、すでに多くの指摘が備わるように、<sup>(3)</sup> 紫上の死を『竹取物語』のかぐや姫昇天になぞらえているからに他ならない。このように見てくると、葵上も同様に、かぐや姫の面影を宿す女君であったと言えそうである。美しいが、冷淡で血の通わない人形のようなかぐや姫は、次第に「あはれ」を知る存在へと変貌してゆく。そして、この世に強い愛着を抱きながら月へと帰還した。源氏との疎隔に苦しみながらも、最期には心を通わすようになった葵上もまた、他の多くの姫君たちとともに、かぐや姫の末裔であった。この世に取り残され、悲嘆に暮れる源氏・左大臣・大宮は、竹取の帝・翁・媼にそれぞれ対応しよう。

かぐや姫になぞらえるということは、物語が葵上を重んじ、厚く哀悼していることに他なるまい。葵上という人物について特徴的なのは、その死後、多くの人々に哀惜、追慕される点である。生前の記述を凌ぐほどに、哀悼場面に多くの筆が費やされるのである。<sup>(4)</sup> 六条御息所・朝顔の姫君からは弔問の手紙が寄せられた。また、葵上の兄、三位中将や母大宮とも故人を偲びあう。

涙もあらそふ心地して、「雨となり雲とやなりにけむ、今

は知らず」とうち独りごちて頼杖つきたまへる御さま、女にては、見棄ててなくならむ魂必ずとまりなむかしと、色めかしき心地にうちまもられつつ（中略）

〔中将〕雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ

行方なしや」と独り言のやうなるを、

（源氏）見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ（葵②五五頁）

愛する歌妓を失った劉禹錫の「嗟く所有り」（『劉禹錫集』外集・卷一）の一節を、源氏は口ずさむ。これに和した白楽天の「劉郎中の鄂姫を傷むに和す」は『文集』第五十五に見える。源氏と中将の深い友情は、白楽天と劉禹錫のそれを彷彿させるものであり、かかる引用は、後の賢木・須磨にまで及ぶ。それはそれとして、禹錫の詩が宋玉「高唐賦」（文選・卷十九）を典拠としていることが重要である。禹錫の亡妻は、神女に喩えられているのであり、これを踏まえた中将と源氏の贈答でも、葵上は神女に見立てられていることになる。さらに源氏は、手習いに「亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに」「君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ」と書き付けた。ともに「長恨歌」を踏まえたもので、それぞれ「旧き枕故き衾、誰と共にか」「霜華白し」による。このように、さまざま引用によって、葵上の記憶がこの上なく美化され、源氏の喪失感が深

められるという仕組みになっているのである。

## 五

葵上の死を悼む人々は多かったが、とりわけ次の場面には胸を打つものがある。

とりわきてらうたくしたまひし小き童の、親どももなくいと心細げに思へる、ことわりに見たまひて、「あてきは、

今は我をこそは思ふべき人なめれ」とのたまへば、いみじう泣く。ほどなき相、人よりは黒う染めて、黒き汗衫、萱草の袴など着たるもをかしき姿なり。（葵②六〇頁）

親を失い、孤児となった童女を、葵上はことのほか可愛がつていたのだという。「ほどなき相、人よりは黒う染めて」とあるのも、いじらしい。これまで見てきたように、冷淡で親しみにくい葵上というのは、源氏の一方的な見方による虚像に過ぎない。孤児を哀れみ、慈しむ、優しく温かい一面が彼女にはあったのである。この童女の存在は、源氏に見えていなかった葵上の真の姿を物語るものとして重要である。今や待望の夕霧も生まれ、葵上は良き慈母となるはずである。しかし、それも突然の死によって叶わぬ夢となった。源氏との新たな夫婦関係、幸福な家庭が期待された矢先であるだけに、いっそう喪失感と絶望は大きい。

いったい、葵上の美質、長所とは、家庭人としての堅実さにあ

るのではないか。一緒に四季の移ろいや管絃を楽しむといった、情趣的なものでなくて、未永く生活をともにできる安心感、信頼に裏打ちされた夫婦関係である。後の六条院における源氏と紫上の夫婦仲などと比べれば、魅力は乏しいが、これはこれで一つの望ましいありかたであろう。中世における葵上の評価は、意外にも好意的・肯定的なものが少なくないのだが、それは彼女のこうした一面を捉えた理解といえる。ちなみに、かかる夫婦仲が誇張、戯画化されたのが、後の夕霧・雲居雁の姿に他ならない。

おほかたの気色、人のけはひも、けざやかに気高く、乱れたる所まじらず、なほこれこそは、かの人々の棄てがたく取り出でしめ人には頼まれぬべけれどと思すものから、あまりうるはしき御さまの、とけがたく恥づかしげに思ひ静まりたまへるを、さうざうしくて  
(帚木①九一頁)

傍線部は、雨夜の品定めでの次の左馬頭の発言を踏まえている。左馬頭のかかる議論に、頭中将は、「我が妹の姫君は、この定めにかなひたまへり」と満足するのだった(帚木①六八頁)。

ただひとへにもそのままやかに静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひ置くべかりける。あまりのゆるゑ、よし、心ばせうち添へたらむをば喜びに思ひ、少し遅れたる方あらむをまながちに求め加へじ。うしろやすくのどけき所だに強くは、うはべの情けはおのづからもてつけつべきわざをや。  
(帚木①六五頁)

葵上の生と死(大井田)

人の御ありさまの、かたほに、そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし、人よりさきに見たてまつり初めてしかば、あはれにやむごとなく思ひ聞こゆる心をも知りたまはぬほどこそあらめ、つひには思ひ直されなむと、おだしく軽々しからぬ御心のほどもおのづからと、頼まるる方はことなりけり。  
(紅葉賀①三一七頁)

これらの場面に、いずれも「頼む」とあるのが注意されよう。源氏はやはり、生涯の伴侶として葵上に全幅の信頼をよせており、未永く連れ添うつもりでいるのである。だからこそ「つひには思ひ直されなむ」(前掲)「つひにはおのづから見直したまひてむ」(葵②四八頁)と悠長に構えていたのもあった。夕霧の誕生を契機に、葵上は良き妻、良き母へと変貌するはずだった。しかし不慮の死によって、その可能性は絶たれた。

### むすび

ことあるごとに葵上は、源氏や母大宮、兄頭中将らに追懷される。大宮は、母のない夕霧を不憫に思い(少女③六九〜七〇頁)、また、権勢を極めた源氏の姿に、葵上の不在を嘆く(行幸③三〇九頁)。

大臣は、中宮の御母御息所の車押し下げられたまへりしをりのこと思し出でて、「時による心おごりして、さやうなる

ことなむ情けなきことなりける。こよなく思ひ消ちたりし人も、嘆き負ふやうにて亡くなりなき」と、そのほどはのたまひ消ちて、「残りともれる人の、中将はかくただ人にて、わすかになりのぼるめり。宮は、並びなき筋にておはするも、思へばいとあはれなれ。」（藤裏葉③四四六〜四四七頁）

葵祭に出かけた源氏は、かつての葵上と御息所の諍いを忌まわしく思い起こす。ただ人に過ぎぬ夕霧と、中宮として時めく秋好と、その子の代になって立場が逆転したことに、世の無常を慨嘆する。

大将の母君を、幼かりしほどに見初めて、やむごとなくえ避らぬ筋には思ひしを、常に仲良からず、隔てある心地してやみにしこそ、今思へばいとほしく悔しくもあれ、また、我が過ちにのみもあらざりけりなど、心一つになむ思ひ出づる。うるはしく重りかにて、そのことの飽かぬかなとおぼゆることもなかりき。ただ、いとあまり乱れたるところなく、すくすくしく、少しさかしと言ふべかりけむと思ふには頼もしく、見るにはわづらはしき人ざまになむ。

（若菜下④二〇八〜二〇九頁）

源氏は、これまで関わってきた女君たちの思い出を葵上に語る。右の評言には、これまで見てきた葵上に特徴的な形容がすべて含まれている。長所短所取り混ぜての、源氏による葵上評である。

いったい、葵上という人物は、藤壺や紫上のように絶対視され

てはいない。また、明石の君や六条御息所のように、際立った個性を示すという人物でもない。しかしながら、追憶の中に何時までも生き続ける、源氏にとってかけがえのない女君の一人であったことも確実である。

## 注

- (1) 秋山虔「光源氏論」『王朝女流文学の世界』（東京大学出版会、一九七二年）、鈴木日出男「主人公の登場」『講座 源氏物語の世界 第一集』（有斐閣、一九八〇年）、吉井美弥子「葵の上の「政治性」とその意義」『読む源氏物語 読まれる源氏物語』（森話社、二〇〇八年）など参照。
- (2) 森下幸男「葵上について」『日本文学研究』（一九五七年）
- (3) 関根賢司「かぐや姫とその裔」『物語文学論』（桜楓社、一九八〇年）、河添房江「源氏物語の内なる竹取物語」『源氏物語表現史』（翰林書房、一九九八年）
- (4) 今西祐一郎「哀傷と死」『源氏物語覚書』（岩波書店、一九九八年）
- (5) 伊井春樹「葵の上の悲劇性」『源氏物語論考』（風間書房、一九八二年）

キーワード：源氏物語、葵上、結婚、うるはし、かぐや姫

## Abstract

葵  
上  
の  
生  
と  
死  
(大井田)

## Life and death of Lady Aoi

Haruhiko Oida

Lady Aoi (Aoi-no-ue) was the daughter of the Prime Minister (Sadaijin), and the first legal wife of Hikaru Genji. But, the couple were not well-matched. It was a political marriage, and this was not a love-match. There were no waka between this couple. The adjective *urubashi* was often used for her. Genji felt her coldness and angularity dissatisfiedly. It was only his prejudice. She had a character warm kindly essentially. She was a domestic, and reliable wife. In the chapter of Aoi, in the marriage ninth year, she became pregnant, conjugal relations have begun to improve. She gave birth to a boy (Yugiri) and has been murdered by Rokujo no Miyasudokoro's spirit. Genji began her who suffered and felt love her very much. Aoi died in the middle of August as if The Moon Princess (Kaguyahime of Taketorimonogatari) returned to the moon. Her death was mourned for, and it was beautified by many words. They were unhappy, but she was an irreplaceable wife. She lived in the recollection of the people.

Keywords: The tale of Genji, Lady Aoi (Aoi-no-ue), marriage, *urubashi*, *Kaguyahime*